九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Nominal Licensing and Agree in Syntactic Theory: The Default Feature Specification on the Phase Heads and Its Theoretical Implications

森竹, 希望

https://hdl.handle.net/2324/7182270

出版情報：Kyushu University, 2023, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

（様式３）

氏　　名　：森竹　希望

論 文 名　：Nominal Licensing and Agree in Syntactic Theory: The Default Feature Specification on the Phase Heads and Its Theoretical Implications
(統語理論における名詞句認可と一致—フェイズ主要部のデフォルトの素性指定とその理論的含意—)

区　　分　：甲

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、生成文法理論に基づき、phi 素性一致の有無に基づく二種類の格付与メカニズムに加え、名詞句の統語的位置を規定する二種類の条件を提案することにより、英語、日本語、トルコ語、韓国語の諸現象に対し、より原理的な説明を与えることを目的としている。更に、英語もしくは日本語を母語とする幼児が発話する文における主語の格標示にも着目し、人間に生得的に備わる普遍文法（Universal Grammar: UG）の一端を明らかにすることを試みている。

第 1 章を導入とし、本論文が依拠する生成文法の極小主義の指針と目的を述べ、本論文の概略を示した。そして第 2 章では、名詞句認可条件に関する重要な先行研究として Chomsky (1981) と Levin (2015) を取り上げ、それぞれの利点と問題点を指摘した。

第 3 章では、現在の極小主義において広く採用されている phi 素性一致の理論的変遷を概観し、英語のような phi 素性一致を持つ言語では Chomsky (2000, 2001) が提案するように phi 素性一致の反映として格付与が行われることを論じた。しかし phi 素性一致を欠くと分析されている日本語のような言語では、phi 素性一致に基づいて格付与がなされると想定できない (e.g. Saito (1985, 2016))。本論文は、日本語では一致が一対多で行われる可能性を指摘した Kuroda (1988) の洞察に基づき、Zeijlstra (2012) の上方一致（upward Agree）を援用した上で、日本語では名詞句と phase 主要部に存在する格素性が上方一致関係を結ぶことで格付与がなされると主張した。本提案で (i) 日本語における多重主格主語構文、多重対格目的語構文、(ii) 日本語の動詞句内部に留まる主語/目的語への主格付与が簡潔に説明できるだけでなく、(iii) phi 素性一致を欠くと分析される韓国語にも本提案が拡張できることを示した。さらに、この一致メカニズムの違いは phase 主要部における phi 素性の有無から導かれることを示した。

第 4 章では、本論文のもう一つの骨子である名詞句認可条件を提案した。まず従来不明瞭なままであったデフォルト格の理論的実装を行なった。そして Chomsky (1981, 1986a) の連鎖の

条件に還元した格フィルターを発展させた形で、名詞句の移動の有無を考慮した二種類の名詞句認可条件を提示した。従来の分析では抽象格を与えられた名詞句の分布のみを踏まえて名詞句認可条件が提示されてきたため、デフォルト格を伴って発音される名詞句の扱いが問題となっていたが、本提案の下ではどちらの格を伴う名詞句の分布も適切に説明できることを導いた。

第 5 章では英語の存在 *there* 構文を分析した。Sobin (2014) の分析を発展させ、*there* 構文では不完全な phi 素性一致が C と意味上の主語の間で行われることで当該の主語はデフォルト格を伴って発音されると提案した。更に先行研究の問題として残っていた *there* 構文における数量詞繰上げの可否や、*who/whom* 問題、*there* 構文に見られる特殊な一致に対して、本論文の意味上の主語のデフォルト格分析、そして名詞句認可条件に基づいた統語的説明を与えた。

第 6 章では、英語の Mad Magazine Sentences、文断片、左方転移を分析した。移動を伴う主語の焦点化及び、左方周辺部への主語の基底生成を想定することにより、それらの文に現れるデフォルト格を伴う主語の分布が名詞句認可条件により適切に説明できることを示した。

第 7 章では日本語の主格脱落と主語認可に関する議論を行い、主語の移動の有無や焦点化/脱焦点化を踏まえると主格の脱落は認可されている主語からのみ可能であることを示した。しかし Fukuda (2022) が指摘するように、音韻的要因も主格脱落の可否に関わっていることを踏まえ、名詞句認可は主格脱落の必要条件ではあるが、十分条件とはなり得ないことを論じた。

第 8 章ではトルコ語、日本語、韓国語に見られる目的語のかき混ぜを分析した。従来格を持たない目的語のかき混ぜは不可能であると指摘されてきたが (e.g. Saito (1985), Kim (1998), Aygen (2007))、談話効果を持つ場合は当該の目的語のかき混ぜが可能となる日本語の新たなデータを示しただけでなく、トルコ語と韓国語においても同様の事実が観察されていることを示した (e.g. Kamali (2015), Lee (2016))。また、それらの事実を提案した名詞句認可条件を用いて説明することで、本論文の分析の妥当性を示した。

第 9 章では、英語あるいは日本語を母語として獲得する幼児が発話する文における主語の格標示を分析した。英語を母語とする 2 歳から 3 歳頃の幼児は、大人の英語には観察され得ない日本語を母語とする幼児、標準日本語ないしは熊本方言を話す大人と同様の主語の格標示のパラダイムを示す (e.g. Schütze and Wexler (1996), Sawada et al. (2010))。本論文はパラメータのデフォルト値に関する Sugisaki and Snyder (2003) の提案を鑑みると、UG には日本語で用いられる phi 素性を欠く phase 主要部がデフォルトとして指定されており、英語を母語とする幼児も phi 素性を完全に獲得するまでは当該の phase 主要部を使用できるために、日本語と同様の主語の格標示を行えると主張した。更にこの提案の帰結として、日本語で利用可能な phase 主要部が UG の初期値である可能性を示した。また本論の主張が正しいとすると、言語獲得においては間接否定証拠も獲得の一つの要因となっていると考えられるはずであると論じた。

第 10 章において本論文における議論を総括し、提案した名詞句認可条件の妥当性の再確認を行った。そして、格と一致に関する研究を通して、英語中心で発展してきた生成文法理論に対して、日本語の見地からも UG の実態の解明という理論的発展に寄与できる可能性を示した。